

2013 年度 第 7 回 全体研究会 近代日本仏教研究（第 3 回）

■報告題目：現代教育と仏教的教化の方法原理—「畏敬の念」から「恭敬の心」へ—

■開催日時：2014 年 1 月 16 日（木）17：00～19：00

■場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室

■報告者：海谷則之（龍谷大学名誉教授）

■コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授、BARC センター長）

■参加者：20 人

【報告のポイント】

海谷則之氏は、現代日本の教育状況をふまえた上で、仏教における教化論、特に親鸞の教化論（「護持養育論」とよぶ）を参照しつつ、仏教的な教化の方法原理を提示した。

【報告の概要】

海谷氏は、これまで、伝統ある仏教の教えと近代の学校教育とのつながりをどう構築したらよいのかについて研究を行ってきた。近代の学校教育は、教科の「道徳」（戦前は「修身」）を中心として行われてきたが、現在、これが十分に機能していない。明治初期に取り入れられた欧米の教育では道徳教育と宗教教育とが密接に結びついていて、日本では宗教（キリスト教）を切り捨てた道徳教育だけを重視してきたことが、そうした機能不全の背景としてある。

「教育」という言葉は、明治初期から一般的に使われるようになった比較的新しい言葉であり、それ以前の日本では「教化」という言葉が長く用いられてきた。「教化」という言葉は、近代では「国民教化」といった使われ方で残ったが、しかしそこにはそれ以前の仏教教育としての「教化」という言葉に込められていた深い含意はない。そこで仏教的な「教化」の本質とはどのようなものなのか。それをしっかりとらえておく必要がある。

現代日本の道徳教育では、「畏敬の念」が重視されており、自然や生命の根源、「人間の力を超えたもの」などに対する「畏敬の念」を教えるための方法が模索されている。だが「畏敬（fear）」という言葉は、ほんらい仏教にはなじまない。そこには「神」（裁きの神・怒りの

神)を畏れ敬うという発想があるが、仏陀は尊敬すべき存在でこそあれ、けっして畏れるべき(怖い)対象ではないからである。

龍樹は、「恭敬(namaskāra)」という言葉を用いて仏教の教化法を示している。「恭敬(reverence)」は、大乘の法をもって衆生を教化することであるといい、「尊重・礼拝・迎來・送別・合掌・親侍」の実践をすすめているのである。恭敬とは、現代風に言えば「おもてなしの心」を指すと言える。こうした恭敬の心の重視は、親鸞の教化論(「護持養育論」)にも通底している。

親鸞は、『教行信証』の「化巻」で最澄の『末法灯明記』を引用し、末法の世には「名字の比丘」(名ばかりの比丘)しかいないが、しかしそうした破戒・無戒の比丘こそ、この世の「真宝」であるとした。そして名字の比丘を安らかに護持養育し、「真の仏弟子」となるよう導くのが、諸仏・諸神・諸菩薩であると説示している。

親鸞によれば、大慈大悲のはたらきである「化スル」(教化)の意味は、「恵む」「教ふ」「憐れむ」「マボロシ」の四つにまとめられる。すなわち、「恵む」=相手を保護養育し、相手に喜びと安らぎを与えることであり、「教ふ」=相手の身になって善く教え導くことであり、「憐れむ」=一切のものを平等に憐れみ哀しんで育てることであり、そして「マボロシ」=相手の能力や状態に応じて姿・形を変えて化現することである。親鸞はこのように教化の意味をとらえつつ、自らも、和文の聖教や和讃の作成、ご消息による教化、漢字にふりがなを付すなどの、丁寧な教化方法をとっていた。

道教や陰陽道や鬼神の説では、神々を恐怖の対象、あるいは災難をもたらす対象としてとらえることが少なくなく、ゆえに神々を怒らせないためにもしばしば除災招福などの宗教儀礼が行われる。これに対し、親鸞は『大集経』から多くを引用して、梵天・帝釈天・鬼神・閻魔法王など天地の神々や諸仏・諸菩薩は、むしろ真実信心の人を護持し養育していると主張した。「現世利益和讃」などにあるように、親鸞は、釈迦は慈父、弥陀は悲母となり種々に善巧方便して我々に真実信心を発起せしめるといい、また諸仏・諸神・諸菩薩は種々の姿・形でもって我々を常に護り育てると説示したのである。

【議論の概要】

桂氏は、本報告の主題の一つである「教化」という言葉は、インドの言葉だとおそらく vinaya(律)にあたり、「しつける」「導く」という意味であると述べた。また親鸞の「教化」論は、

華嚴經の「護持／加持」の考えと関係があると思われ、相手に応じて姿を変えて教えを説くという、華嚴經入法界品に登場する教化法にも通じるところがあると指摘した。

滝内大三氏は、公教育において宗教を教えるには、宗派を超える必要があるのではないかと問うた。海谷氏はこれに対し、公教育における特定の宗派的教育は難しいが、宗教的な情操教育は可能であり、「恭敬」のような仏教の言葉ではなく、「おもてなしの心」といったかたちで仏教的なメッセージを伝えることは可能であると答えた。

藤能成氏は、近代以降の学問は科学的なものの考え方が中心であり、仏教の「教化」のような精神性は薄まっていると述べた上で、そうした精神性を学生に身に付けさせていくためには、知識教育のみならず、瞑想や静坐のような実践も必要なのではないかと論じた。

最後に海谷氏は、漢字の「教」より以前にさかのぼる古語の「教ふ」という言葉は、もともと「オシム（愛する）」という古語から派生しており、仏教の根底にある「人間愛」とも通じるそうした相手をいとおしむ心が、いろいろな手立てを通して現代における教育・教化につながっていくと指摘した。

